

2020年8月30日

## 主の栄光の輝き

厳しい暑さが続いています。今年の夏は、マスクを着けて熱中症対策も行うという異例の対応を迫られていますが、今日の福音の中でイエスさまは「苦しみ」との向き合い方をわたしたちに示しておられます。

「イエスは、ご自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。」（マタ16・21）

イエスさまは天の御父から託されたご自分の使命として、すべての人を救うためにエルサレムに入り、十字架上の死を迎えた後、復活するということを弟子たちにはっきりと示されました。「長老」「祭司長」「律法学者」は、イエスさまが十字架につけられる際の主要な人物ですので、すでに十字架への歩みが始まっていることが説明されている、と言ってよいでしょう。ところがペトロは「あなたはメシア、生ける神の子です」（マタ16・15）と立派な信仰宣言を行った直後に「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」（マタ16・22）と十字架上の死と復活を否定してしまいます。このペトロとイエスさまの間答には、わたしたちの信仰生活にとって、また困難の中で希望をもって人生を歩み続けるための、大切なメッセージが隠されているように思われます。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。」（マタ16・24-25）

——人生の目的は、所有ではない——というメッセージが響いています。

誰にとってもこの地上の「命」は、金よりも財産よりも守るべき重要なものです。しかしこの大切な命を思うばかりに「命は、神さまからお預かりしているもの」という感覚を忘れてしまうことはないでしょうか。ペトロは、イエスさまと過ごした日々をいとおしみ、大切に感じていたことでしょうか。その反面、絶対にイエスさまを失いたくないという所有欲や自己中心的な思いも心に抱きはじめていたかもしれません。キリストの十字架は、人間中心の生き方から神中心の生き方へとわたしたちを招きます。自分を守ることから自分を与える喜びへと導きま

す。

長引くコロナ対策の中で最近の報道によれば、7割の子どもたちが何らかのストレスを感じており、4割の学生たちは「孤独」や「孤立」を感じている、というニュースを耳にします。わたしたちは今、おとなも子どもも、多くの苦しみや病への不安、好ましくない日々の体験や苦悩を抱えていますが、それらを増幅させるのではなく、美しいことや健全なこと、自然との調和、友情と寛容、尊敬や連帯の精神を育むことができますように心から祈りたいと思います。

イエスさまの十字架は、マイナスに見える出来事でさえも—主の栄光の輝き—を発見するチャンスへと導いてくださいます。日々、回心の恵みを願い求めましょう。

「心を新たにしてお自分を改めていただき  
何が神の御心であるか、何が善いことで  
神に喜ばれ、また完全なことであるかを  
わきまえるようになりなさい。」  
(ロマ12・1-2)

カトリック立川教会 主任司祭  
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝

●年間第22主日聖書朗読箇所：

- ① エレミヤ20・7-9  
—答唱詩編—詩編63より
- ② ロマ書12・1-2
- ③ マタイ16・21-27